

## 対人恐怖傾向と自己愛傾向の共通構造としての自己概念の 乖離性及び不安定性の検討<sup>1),2)</sup>

川崎直樹 小玉正博

筑波大学大学院人間総合科学研究科 筑波大学心理学系

本研究では、自己愛傾向と対人恐怖傾向の2つのパーソナリティ特性が、いずれも乖離のある不安定な自己概念を背景要因としていると仮定して検討を行った。大学生341名に、自己概念の肯定性と乖離性を測る尺度、自己概念の不安定性を測る尺度、自己愛傾向、対人恐怖傾向を測る尺度からなる質問紙調査を行った。自己概念の肯定性は日常的に知覚される自己像の測定により指標化され、乖離性は自己肯定的及び自己否定的場面を想定したときに知覚される自己像の評定差によって指標化された。その結果、自己概念の肯定性は対人恐怖傾向と負の相関、自己愛傾向と正の相関を示した。一方で、自己概念の乖離性と不安定性については、対人恐怖傾向及び自己愛傾向の下位側面との間に正の相関を一部示した。以上の結果から、この両パーソナリティ特性がともに、乖離のある不安定な自己概念を維持・構築するプロセスとして理解される可能性について議論された。

**キーワード**：対人恐怖、自己愛、自己概念の乖離性、自己概念の不安定性

### 問題と目的

対人恐怖は、日本においてよく見られる心理的問題であり、精神科の診断単位としてだけではなく、主に青年期において経験される一般的な悩みとしても研究が多くなされてきた（堀井・小川, 1996; 永井, 1994）。特に、社会的ひきこもり（北西・久保田, 1998; 牛島・佐藤, 1997）など、現代的な様々な問題との関連も指摘されており、近年でも臨床心理学の重要な研究テーマの1つとなっている。

対人恐怖の形成・維持に関わる要因は様々挙げられているが、近年の情報処理プロセスに注目した研究の中で重要とされる要因の1つに、自己概念がある（Hirsch, Clark, Mathews, & Williams, 2003; Rapee & Heimberg, 1997）。これまでの研究で、対人恐怖（もしくは対人不安）的な傾向が高い者は、自己概念が否定的であることが一貫して示されている（de Jong, 2002; Leary & Kowalski, 1993; 岡田・永井, 1990）。こうした否定的な自己概念は対人場面において活性化・意識化され、“自分は他者から否定的な評価をされている”といった推論がもたらされやすくなり、不安や恐怖が高められるとされている（Rapee & Heimberg, 1997）。

しかしながら、日本における対人恐怖についての臨床的研究からは、上記のような“対人恐怖の背景に否定的自己概念がある”という見解とは、若干異なる見解が呈示されている。そうした指摘は特に、自己愛と対人恐怖の関連についての議論

1) 本論文は、第1筆者が2002年度に筑波大学人間総合科学研究科に提出した修士論文を再分析し加筆・修正したものである。

2) 本研究における調査にご協力いただいた全ての方々に、心から御礼申し上げます。また、本論文の構成に貴重な示唆を与えて下さった審査委員の先生方に感謝申し上げます。

に見て取ることができる。例えば三好(1970)は、“うぬぼれ”という観点から議論し、対人恐怖者の「自己」が現実的な関係様態とは次元の異なる想像的な関係様態に存在していることを指摘している。対人恐怖者は、その想像的な自己に満足を感じ、それに重きを置くがゆえに現実ではつねに挫折感を味わうとしている。また鱸(1990)は、対人恐怖の背景には、非現実的に誇大な“偽りの自己”を現実の自己であると思込もうとする自己愛的な病理があるとしている。鍋田(1997)は、対人恐怖者の多くは、幼児期に親の期待や賞賛による自己愛の充足を受け、非現実的に理想的な“受身的理想自己”を形成していると指摘している。そして現実検討力が増す青年期に至ると、現実的な他者との接触によって受身的理想自己は否定され、そのために羞恥・不安など対人恐怖的な体験をすることになると指摘している。これらの見解は、対人恐怖者の自己概念が一義的に否定的なのではなく、非現実的に肯定的な側面も同時に有しており、その対比が対人恐怖の体験の背景となっていると理解しているのである。

以上のような臨床的指摘から、対人恐怖の維持・形成過程を理解する上では、こうした肯定的・否定的な自己像が並存した自己概念について検討することが重要と考えられる<sup>3)</sup>。特に、パーソナリティを対人的な自己構築のプロセスとして捉える立場(Mischel & Morf, 2003; Morf & Rhodewalt, 2001)に従えば、こうした自己概念がどのような特徴を持ち、どのようなプロセスで形成・維持されるのかを理解することで、対人恐怖について新たな見解が得られると考えられる。

3) 本研究では、ある時点で意識化され知覚される自己の表象を「自己像」と呼び、そうした自己像の背景にある自己知識の集合全体を「自己概念」と呼ぶ。こうした区別は、Markus & Wurf (1987) の「作動自己概念」の考え方や、梶田(1988)による「自己意識」と「自己概念」の区別と枠組みを同じくするものである。

このような対人恐怖に特徴的な自己概念のあり方が、自己愛人格障害における自己概念のあり方と類似していることを指摘し、両者について包括的な議論を行ったのが岡野(1998)である。岡野は、自己愛人格者・対人恐怖者の自己概念に、“極度に理想化された自己イメージと過度に卑下された自己イメージとの間を揺れ動き、決してその中間の自己イメージに安定することができない(岡野, 1998, p. 29)”という共通した構造があると指摘している。対人恐怖者は主に“極度に卑下された自己イメージ”を自身の拠点とし、自己愛人格者は主に“極度に理想化された自己イメージ”を自身の拠点としているとされる。両者は拠点とする自己イメージが異なるため、その表面的特徴は異なったものとなる。しかし、両者の自己概念の中には共通して、価値的に乖離のある両極端の自己像が並存していることを指摘したのである<sup>4)</sup>。

しかしながら、こうした自己概念のあり方と対人恐怖との関連を検討した実証的・数量的研究はこれまでには行われていない。自我同一性(谷, 1997)や人格の二面性(永井, 1985)、対自他認知体系(松井, 1990)などの観点からの検討はなされてきたが、上記のような肯定的・否定的な自己像の並存については直接的に扱われてはいない。自尊感情の継時的な変動性と対人不安との関連について検討された研究もあるが(Kernis, Granne-mann, & Barclay, 1992)、有意な関連は見出されてはいない。そこで本研究では、岡野(1998)が指摘するような“肯定的-否定的に乖離のある自己像を自己概念に含んでいる傾向”を「自己概念の乖離性」と呼び、その指標化を試み、対人恐怖の指標との関連を検討することとする。

なお、岡野(1998)はこうした乖離性のある自己概念は対人恐怖者と自己愛人格者の双方に共通す

4) 岡野(1998)はこうした特徴を“分極化した「自己イメージ」と呼んだが、本研究では連続的な特徴として操作的に概念化するため、“乖離”もしくは“乖離性”という表現を用いることとした。

る構造であると指摘している。しかしながら、自己愛人格と対人恐怖の傾向に関するこれまでの研究(小塩, 2002; 清水・海塚, 2002)では、両者の直接的な関連の検討はなされているが、自己概念の特徴の共通性については検討されていない。そこで本研究では、対人恐怖的な特徴を示す傾向(以下、対人恐怖傾向と呼ぶ)と自己愛人格的な特徴を示す傾向(以下、自己愛傾向と呼ぶ)に、自己概念の乖離性が共通して関連を示すかどうかを検討することとする。自己概念のあり方の共通点・相違点について検討することで、両パーソナリティについて、より明確な理解が得られると考えられる。

岡野(1998)によれば、対人恐怖者は否定的な自己像を拠点とし、自己愛人格者は肯定的な自己像を拠点としているとされる。従来の研究で、対人恐怖者の自己概念が否定的であり(岡田・永井, 1990 など)、自己愛人格者の自己概念が肯定的である(Rhodewalt & Morf, 1995 など)と記述されて来たのは、この拠点となる自己像の肯定性・否定性が、自己概念の全体的な肯定性・否定性として反映されているからであると考えられる。本研究でもこれに準じて、拠点となる自己像がどの程度肯定的-否定的であるかを「自己概念の肯定性」として指標化することとする。この肯定性は、対人恐怖傾向とは負の関連、自己愛傾向とは正の関連を示すと考えられる。

その上で、こうした拠点となる自己像とは異なる、非現実的に肯定的もしくは否定的な自己像が存在すると仮定する。人間が知覚する自己像の中には、日常的に頻繁に知覚されるアクセシビリティの高いものと、特定の状況や刺激に応じてのみ活性化され知覚されるアクセシビリティの低いものがあるとされる(Markus & Wurf, 1987)。上記のような拠点とは異なる自己像も、アクセシビリティの低い自己像であると考えられる。個人が極端に肯定的もしくは否定的な自己像を有しているとすれば、その自己像の内容に一致するような

体験をしている自己肯定的・自己否定的な状況を想起することで、それぞれの自己像が活性化され、知覚が可能になると考えられる。想起によって活性化された2つの自己像を評定し、それがどの程度の評価的な乖離を示すかを検討することによって、個人の自己概念の乖離性を指標化できると考えられる。

また岡野(1998)は、対人恐怖者及び自己愛人格者の自己概念の特徴として、両極端な自己像が内包されていることだけではなく、それらが“揺れ動き”や“交替現象”を示して変動し、不安定さを示すことも指摘している。上述の乖離性の捉え方では、個人が自己概念内に保持している自己像間の乖離の大きさは反映されても、実際に知覚される自己像がどの程度変動しやすいかは反映されない。そこで本研究では、こうした“知覚される自己像の変動しやすさ”を「自己概念の不安定性」とし、先行研究(Rosenberg, 1965; 小塩, 2001)に基づいて測定し、乖離性と合わせて検討を行うこととする。こうした乖離性及び不安定性の高さは、対人恐怖傾向と自己愛傾向に対し共通して正の関連を示すと考えられる。

なお、岡野(1998)が指摘する自己像の“揺れ動き”や“交替現象”などの不安定さは、乖離という自己概念の構造的な特徴から生まれるものとして理解できる。そのため、乖離性の高さを背景として不安定性が高まり、それが対人恐怖傾向及び自己愛傾向に影響するという過程が考えられる。こうした媒介的な過程についてもあわせて検討を行うこととする。

以上から、本研究では以下のような仮説を設定し、検討を行うこととする。

(仮説1) 対人恐怖傾向は、自己概念の肯定性の低さ及び乖離性・不安定性の高さと関連する。

(仮説2) 自己愛傾向は、自己概念の肯定性の高さ及び乖離性・不安定性の高さと関連する。

(仮説3) 乖離性は不安定性を介して、対人恐怖傾向及び自己愛傾向に影響する。

## 方 法

### 調査時期

2002年11月下旬から12月上旬にかけて実施した。また本研究で新たに作成した尺度の再検査信頼性の検討のため、約1ヶ月後に被調査者の一部に対し再調査を行った。

### 調査対象

茨城県、東京都、愛知県にある大学の学生に質問紙調査を実施し、回答に不備のない341名（男性176名、女性165名）を分析対象とした。対象者の平均年齢は20.15歳 ( $SD=1.54$ ) であった。また再調査において回答の対応が確認できた被調査者は106名（男性42名、女性64名）で、平均年齢は19.68歳 ( $SD=1.58$ ) であった。

### 手続き

講義時間後に質問紙への回答を依頼した。その際、回答は義務ではなく拒否できる点、回答を拒否しても不利益がない点を全体に説明した。質問紙は一斉配布し、回答後に回収した。

### 調査内容

(1) 自己概念の肯定性と乖離性の測定 まず、個人の中で日常的に知覚され拠点となっている自己像を「基盤的自己像」とし、“以下の言葉の対について「いつもの自分」に最も近いところひとつに○をつけてください。”との教示文を示した上で評定を求めた。この基盤的自己像への評定を、自己概念が全体的にどの程度肯定的-否定的であるかを表す「自己概念の肯定性」の指標として用いることとした。次に、自己肯定的なイベントの想起によって活性化される自己像を「高揚的自己像」、自己否定的なイベントの想起によって活性化される自己像を「卑下的自己像」として、この2つの自己像それぞれに対する評定を求めた。高揚的自己像（卑下的自己像）については、“自分が人より優れている（劣っている）と感じられた出来事があったときのことを、できるだけしっかり思い浮かべてください。”という教示文で想起

を求めた上で、“以下の言葉の対について「そのときの自分」に最も近いところひとつに○をつけてください。”と評定を求めた<sup>5)</sup>。この高揚的・卑下的自己像との評定の差を、「自己概念の乖離性」の指標とすることとした。なお、これら自己像の評定項目は、山本・松井・山成(1982)による大学生にとって重要とされている「社交」、「知性」、「優しさ」、「容貌」、「生き方」の5側面に対応させ、2項目ずつ作成した<sup>6)</sup>。それぞれ「人づきあいの少ない-人づきあいの多い」といった対語としてTable 1にあるような計10項目を設定した。各項目の内容的妥当性については筆者と心理学を専門とする大学教員によって確認がなされた。この10項目にフィラー項目2項目を加えた計12項目をランダムに配列した。各対語を左右両端に呈示し、右側の肯定的な語にあてはまるほど得点が高くなるよう、“非常に(1点)”，“かなり(2点)”，“やや(3点)”，“どちらかという(4点)”，“どちらかという(5点)”，“やや(6点)”，“かなり(7点)”，“非常に(8点)”の8件法で回答を求める形式とした。高揚的自己像と卑下的自己像の提示順は質問紙作成時にカウンターバランスを取った。なお、再調査はこの自己概念の肯定性と乖離性の測定のみ行われた。

(2) 対人恐怖傾向 堀井・小川(1996)の対人恐怖心性尺度を用いた。この尺度は対人恐怖的な悩みを表す6下位尺度「自分や他人が気になる悩み」、「集団に溶け込めない悩み」、「社会的場面で当惑する悩み」、「目が気になる悩み」、「自分を統制できない悩み」、「生きることに疲れている悩み」

5) 岡野(1998)は、自己愛人格者及び対人恐怖者において「強い自己」-「弱い自己」という次元で自己像の分極化が起きているとしている。これに基づき、本研究での自己像の活性化状況の説明には、自己の強さ-弱さを実感しやすい“優れている”，“劣っている”という表現を用いた。

6) 山本他(1982)によれば、「経済力」も自尊心への影響が強いとされていたが、物理的な側面であるため、乖離性が現れにくいと考えて除外した。

Table 1 各自己像における項目ごとの評定値の平均値・標準偏差

項目	基盤的自己像		高揚的自己像		卑下的自己像	
	M	SD	M	SD	M	SD
1 人づきあいの少ないー人づきあいの多い	4.52	1.69	5.09	1.68	3.43	1.60
2 個性的な生き方をしていない ー個性的な生き方をしている	5.24	1.64	5.74	1.52	4.14	1.81
3 思いやりのないー思いやりのある	5.37	1.40	5.68	1.47	4.09	1.70
4 顔が整っていないー顔が整っている	4.26	1.40	4.72	1.58	3.57	1.53
6 もの知りでないーもの知りな	4.41	1.57	5.25	1.64	3.47	1.64
7 人に対して優しくないー人に対して優しい	5.33	1.43	5.66	1.56	4.05	1.72
8 人づきあいが下手なー人づきあいが上手い	4.12	1.69	5.01	1.72	3.16	1.59
10 頭の回転がわるいー頭の回転がよい	4.54	1.67	5.50	1.58	3.46	1.72
11 外見の良くないー外見の良い	4.21	1.47	4.79	1.59	3.51	1.55
12 自分らしく生きていない ー自分らしく生きている	5.33	1.66	5.86	1.50	4.08	1.84

注. 右側の語に近いほど評定値が高い。

からなる。各下位尺度5項目、全30項目である。なお、原尺度は7件法であるが、回答時の負荷を考慮し、本研究では“まったくあてはまらない”(1点)から“とてもよくあてはまる”(5点)の5件法で回答を求めた。

(3) 自己愛傾向 小塩(1998)の自己愛人格目録短縮版を用いた。「優越感・有能感」,「注目・賞賛欲求」,「自己主張性」の3下位尺度からなる。各下位尺度10項目、全30項目である。“まったくあてはまらない”(1点)から“とてもよくあてはまる”(5点)の5件法で回答を求めた。

(4) 自己概念の不安定性 知覚される自己像が変動しやすく、自己概念が全体的に不安定である傾向を表す尺度として、Rosenberg(1965)のStability of Self Scaleを基に作成された小塩(2001)の自己像の不安定性尺度を用いた。“私は自分自身に対する考えが、とても変わりやすい”などの項目からなり、得点が高いほど自己概念が不安定であることを示す。全5項目について、“まったくあてはまらない”(1点)から“とてもよくあてはまる”(5点)の5件法で回答を求めた。

## 結 果

### 自己概念の各指標の検討

まず、各自己像への評定の特徴について検討を行った。基盤的自己像、高揚的自己像、卑下的自己像それぞれにおける10項目の評定(フィラー項目を除く)をTable 1に示した。この10項目の1次元性を検討するため、基盤的自己像の10項目の評定について主成分分析を行った。その結果、第1主成分への各項目の負荷量が.74~.36と、1次元性を示す上で十分な値を示した。この基盤的自己像への10項目の評定の合計を「自己概念の肯定性」の指標とした。なお、この基盤的自己像に関する分析結果に基づき、他の指標の算出の際にも全10項目の評定を用いることとした。

また、教示文によって自己肯定的・否定的イベントの想起及び自己像の活性化が妥当になされたかどうかを検討するため、基盤的自己像、高揚的自己像、卑下的自己像の評定の合計得点について、被調査者内1要因の分散分析を行って比較した。その結果、主効果が有意であり( $F(340, 2)=452.21, p<.01$ )、多重比較(LSD法)の結果、高揚的自己像は基盤的自己像より得点が高く、卑下的自己像は基盤的自己像より得点が高いことが

Table 2 自己概念に関する各指標の基礎統計量, 信頼性係数, 相関係数

		M	SD	信頼性		相関係数			
				$\alpha$	再検査	1	2	3	4
1	肯定性 (基盤的自己像)	47.35	9.09	.78	.78	—			
2	高揚的自己像	53.28	10.24	.85	.30	.70**	—		
3	卑下的自己像	36.96	11.36	.87	.35	.63**	.28**	—	
4	乖離性	17.42	12.49	.91	.61	.01	.54**	-.64**	—
5	不安定性	16.55	4.28	.80	—	-.22**	-.03	-.28**	.24**

\*\* $p < .01$ 

示された ( $MSe=51.50$ , いずれの水準間も  $p < .01$ )。このことから, 基盤的自己像に比してより肯定的に高揚した自己像及び否定的に卑下された自己像を活性化させる状況の想定が, 妥当になされていたことが確認された。

次に, 自己概念の乖離性の指標を得るため, 高揚的自己像-卑下的自己像の各項目間の評定差を算出した。全10項目における評定差について主成分分析を行った結果, 第1主成分への負荷量が .79~.67 と, 1次元性を示す上で十分な値が確認された。この結果に従い, 評定差について合計点を算出し, 「自己概念の乖離性」の指標とした。

自己概念の肯定性と乖離性, 高揚的自己像及び卑下的自己像への評定の合計点, 自己像の不安定性尺度の合計点について, 基礎統計量及び相互の相関係数を Table 2 に示した。また, 自己概念の各指標については再検査信頼性係数も算出し, 合わせて Table 2 に示した。その結果,  $\alpha$  係数は全尺度とも十分な値を示した。再検査信頼性については, 高揚的自己像及び卑下的自己像では, 比較的低い値が見られたが, 主要な指標である肯定性, 乖離性については許容できる十分な値が示された。また, 乖離性と不安定性との間 ( $r = .24, p < .01$ ), 肯定性と不安定性との間 ( $r = -.22, p < .01$ ) に有意な関連が見られ, 相互に関連する特徴であることが示された。なお不安定性は, 高揚的自己像との相関が有意ではなく ( $r = -.03, n.s.$ ), 卑下的自己像との相関のみ有意であった ( $r = -.28, p < .01$ ) が, 肯定性を統制した偏相関係数を算出すると, 双方

ともに有意な相関を示した (高揚的自己像で  $r = .17$ , 卑下的自己像で  $r = -.18$ , いずれも  $p < .01$ )。このことから, 肯定性の影響で単相関係数には十分反映されていなかったが, 不安定性指標は, 肯定的・否定的いずれの方向への乖離とも関連することが確認された。

#### 自己概念の各指標と各傾向との関連

**対人恐怖傾向との関連** まず, 対人恐怖傾向の尺度について, 全体の合計得点と下位尺度ごとの合計得点を算出した。各得点の基礎統計量については Table 3 に示した。次に仮説1の検証のため, 対人恐怖傾向の全体合計得点及び下位尺度得点と, 自己概念の肯定性, 乖離性, 不安定性との相関係数を算出した。また, 自己像の乖離が肯定的な方向に起きているのか, 否定的な方向に起きているのかによって関連が異なるかを検討するため, 高揚的・卑下的自己像の合計評定との相関を示した。その際, 肯定性の指標と高揚的・卑下的自己像の合計評定との相関が顕著である ( $r = .70, .63$ , いずれも  $p < .01$ ) ことを考慮し, 肯定性の影響を統制した偏相関係数をあわせて算出した (Table 3)。

分析の結果, 肯定性と対人恐怖傾向とは全般的に負の関連を示した。これは仮説1に合致する結果であった。また, 乖離性と対人恐怖全体との間には, 肯定性に比して低い値ではあるものの正の有意な関連が見られた。詳細に見ていくと, 下位側面の中では「自分や他人が気になる悩み」と「自分が統制できない悩み」との関連が有意であった。高揚的・卑下的自己像の評定との関連として

**Table 3** 自己概念に関する各指標と対人恐怖傾向・自己愛傾向との関連

	M	SD	α	相関係数				
				肯定性	乖離性	高揚的自己像	卑下的自己像	不安定性
対人恐怖全体	86.86	21.78	.93	-.59**	.11*	-.37** (.07)	-.46** (-.14**)	.35**
自分や他人が気になる悩み	16.38	4.68	.82	-.25**	.18**	-.12* (.07)	-.30** (-.18**)	.39**
集団に溶け込めない悩み	14.96	5.35	.92	-.51**	.05	-.34** (.02)	-.36** (-.05)	.11*
社会的場面で当惑する悩み	15.26	5.51	.91	-.45**	.06	-.29** (.04)	-.37** (-.11*)	.20*
目が気になる悩み	12.59	5.55	.91	-.37**	.05	-.20** (.08)	-.26** (-.05)	.16**
自分が統制できない悩み	14.38	4.93	.89	-.44**	.15**	-.25** (.09)	-.37** (-.14*)	.40**
生きることに疲れている悩み	13.29	4.99	.86	-.43**	-.01	-.34** (.06)	-.27** (-.03)	.24**
自己愛全体	90.57	17.18	.91	.65**	.06	.52** (.12*)	.40** (-.02)	-.08
優越感・有能感	27.73	7.15	.89	.66**	.00	.50** (.07)	.45** (.06)	-.17**
注目・賞賛欲求	32.12	8.17	.89	.35**	.15**	.35** (.15*)	.15** (-.10*)	.16**
自己主張性	30.72	6.65	.81	.52**	-.03	.37** (.01)	.35** (.04)	-.21**

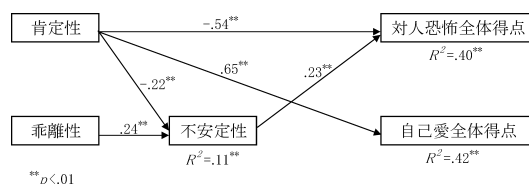
注. 高揚的自己像及び卑下的自己像の行の括弧内の値は肯定性を統制した偏相関係数である。

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

は、偏相関係数に主に着目した場合、卑下的自己像との負の関連が全体的に有意であった。不安定性については、対人恐怖全体及び下位尺度全般に有意な正の関連が示されていた。下位側面の中では、乖離性指標同様、「自分や他人が気になる悩み」と「自分が統制できない悩み」との関連が比較的顕著であった。以上から、乖離性との関連は全体的に低い値となったが、不安定性とともに対人恐怖傾向との有意な関連がいくつか見られ、仮説1にある程度合致する結果が得られたと考えられる。

**自己愛傾向との関連** 自己愛傾向の尺度についても、全体の合計得点と下位尺度ごとの合計点を算出した。各得点の基礎統計量についてはTable3にあわせて示した。

仮説2の検証のため、対人恐怖傾向と同様、自己愛傾向と自己概念の各指標との相関係数を算出した(Table3)。分析の結果、自己愛傾向と肯定性との間には全般的に正の関連が見られた。これは仮説2に合致する結果と言える。一方、自己愛全体得点は、乖離性とは有意な関連を直接示さなかったが、高揚的自己像との偏相関が有意であった。詳細に見ていくと、下位側面の注目・賞賛欲求は、乖離性と有意な正の関連を示し、高揚的・



**Figure 1** 自己概念の肯定性、乖離性、不安定性が対人恐怖全体得点と自己愛全体得点に影響を及ぼす過程 (パス図)

卑下的自己像いずれとの偏相関係数も有意であった。不安定性については、乖離性と同様に注目・賞賛欲求とは正の関連を示したが、その他の側面については負の関連が示されていた。

以上から、仮説2の肯定性に関する点については支持が得られた。しかし乖離性・不安定性に関しては、注目・賞賛欲求との正の関連が有意である一方、仮説とは逆の負の関連も同時に見られており、詳細な議論の必要性が示唆された。

**自己概念の肯定性、乖離性、不安定性が両傾向に及ぼす影響の検討**

**パス解析** 仮説3の検討のため、自己像の肯定性と乖離性を第1水準、不安定性を第2水準、対人恐怖全体得点と自己愛全体得点を第3水準に設定し、重回帰分析によるパス解析を行った(Figure 1)。その結果、乖離性は不安定性に影響を与

**Table 4** 対人恐怖傾向・自己愛傾向の下位尺度についての重回帰分析

	標準化偏回帰係数			R <sup>2</sup>
	肯定性	乖離性	不安定性	
対人恐怖傾向下位尺度				
自分や他人が気になる悩み	-.18*	.10*	.32**	.19**
集団に溶け込めない悩み	-.51**	.05	.01	.26**
社会的場面で当惑する悩み	-.32**	.04	.09	.22**
目が気になる悩み	-.35**	.04	.08	.14**
自分が統制できない悩み	-.38**	.08	.29**	.30**
生きることに疲れている悩み	-.40**	-.05	.17**	.21**
自己愛傾向下位尺度				
優越感・有能感	.66**	.00	-.03	.44**
注目・賞賛欲求	.40**	.09	.23**	.19**
自己主張性	.50**	-.01	-.10*	.28**

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ 

え、不安定性は対人恐怖全体得点に影響を与えるという過程が示された。一方、自己愛全体得点に対しては、乖離性及び不安定性からの影響は示されなかった。

**下位側面についての重回帰分析** 上記の結果を踏まえ、より詳細な検討を行うため、自己概念に関する各指標を独立変数、各傾向の下位尺度を従属変数とした重回帰分析（一括投入法）を行った（Table 4）。

その結果、対人恐怖傾向では、不安定性から「自分や他人が気になる悩み」、「自分が統制できない悩み」、「生きることに疲れている悩み」への正の影響が見られた。また不安定性に比して低い値ながらも、乖離性からの直接の正の影響が「自分や他人が気になる悩み」に対して見られた。

自己愛傾向についての分析結果では、相関分析同様、注目・賞賛欲求に対して不安定性からの正の影響が見られた。逆に、不安定性から自己主張性に対しては負の影響が示されていた。

## 考 察

### 自己概念に関する各指標の特徴について

本研究で主に用いた肯定性、乖離性の指標の信頼性については、内的一貫性、再検査信頼性とも

に十分許容される値が示されたと考えられる。高揚の自己像と卑下の自己像の評定値については、測定時点によって異なる場面が想定されやすくなり、評定値が安定しなかったと考えられる。しかしながら、乖離性指標の再検査信頼性は、若干低いながらも許容できる値を示しており、乖離性という特徴自体には時間的にある程度安定した性質があると考えられる。また、乖離性と不安定性との正の相関から、両者がある程度連動する特徴であることが確認された。乖離した両極端の自己像が、日常の中で別々に活性化されることによって、自己概念が不安定で変動的なものになりやすと考えられる。

なお、肯定性と乖離性は無相関であり、両者を独立した特徴として捉えられることが示唆された。その一方で、不安定性と肯定性との間には負の関連が見られた。これは、自己概念が否定的であると、自己確証を行う際に否定的な自己関連情報との直面が伴うため、確証が避けられ、自己概念が不明確になりやすい（Campbell, 1999）ためと考えられる。乖離性の問題だけでなく、自己概念が否定的であること自体が自己概念の不安定性に関連しうることが示唆されたと言える。

### 対人恐怖傾向と自己概念の特徴との関連について

まず、肯定性に関しては仮説1に一致して、対人恐怖傾向との負の関連がいずれの分析においても見られた。この結果はこれまでの先行研究（岡田・永井, 1990 など）に一致した知見である。全体的に乖離性や不安定性の指標よりも強い関連を示している点からも、否定的な自己概念が対人恐怖の形成・維持過程に寄与する重要な要因であることが確認されたと言える。

一方、乖離性・不安定性と対人恐怖全体との間にも、仮説1に合致する方向での有意な正の関連がいくつか見られた。乖離性との関連について詳細に見るため、肯定性を統制した高揚的・卑下の自己像の評定との偏相関の結果に注目していくと、まず高揚の自己像と対人恐怖全体との偏相関係数



が有意でなかったことが見出される。これは、対人恐怖者が現実的な自己像から乖離した過剰に肯定的な自己像を有しているという臨床的な見解(三好, 1970; 鍋田, 1997; 鑑, 1990)に合致しない結果とも考えられる。しかしながら、そうした過剰に肯定的な自己像は、空想の中で肥大したものであるとも指摘されている(三好, 1970; 鍋田, 1997)。本研究での自己像の活性化では、具体的な出来事の想起を求めたため、個人の空想的な自己像のあり方が反映されていなかったとも考えられる。この点については、今後他の手法などを用いた検討を加える必要があると考えられる。対照的に、卑下の自己像と対人恐怖全体との偏相関は有意であった。このことから、否定的な方向に大きく乖離した自己像を有している傾向が対人恐怖につながりやすいことが示唆される。岡野(1998)は、理想的な自己像と対比されて過剰に卑下された自己像を“恥ずべき自己”と呼び、対人恐怖者はその恥ずべき自己像に自己を同一視することで恥の感情を体験すると指摘している。上記の結果と考えあわせると、日常的に拠点としている否定的な自己像よりもさらに著しく卑下された自己像を有していると、それが活性化された時に自身が恥ずべき存在であると感じられ、対人恐怖的な恥や不安が体験されると考えられる。

さらにパス解析の結果から、仮説3に合致して、乖離性は不安定性を介して対人恐怖傾向に影響することが示された。乖離によって自己概念が不安定になり、その不安定な自己概念が、社会的なフィードバックによる確証や安定化を必要とする(上瀬・堀野, 1995)ため、他者からの評価への敏感さや懸念が高まり、対人恐怖につながっているという過程が存在すると考えられる。特に重回帰分析においては、下位側面の「自分や他人が気になる悩み」に対して乖離性・不安定性の影響がともに示され、特に不安定性は肯定性よりも強い影響を示していた。「自分や他人が気になる悩み」は、“他人が自分をどのように思っているのかと

とても不安になる”などの項目からなり、他者からの評価への意識や懸念という対人恐怖の基礎的要素(Rapee & Heimberg, 1998)に関わる側面である。したがって上記の結果は、乖離や不安定さのある自己概念が、対人恐怖の形成・維持の基礎的な過程に関わる重要な要因であることを示唆していると考えられよう。

なお重回帰分析において特に、不安定性から「自分が統制できない悩み」(項目例; “根気がなく何事も長続きしない”), 「生きることに疲れている悩み」(項目例; “充実して生きている感じがしない”)への影響が有意であった。これらの側面は、いずれも物事や生活への意欲的・積極的な関与が失われている傾向を表している。上記の考察とあわせて考えると、乖離があり不安定な自己概念を有している個人は、他者からの評価への関心が強いあまり、自身の内発的な動機・意思に基づく物事への関与が妨げられていると考えられる。そのため充実感も得られず、何事も長続きしない状態に陥っていると考えられる。こうした特徴は、対人恐怖に伴う特徴である“自分のなさ”(鍋田, 1997)の現れとも考えられ、乖離や不安定さのある自己概念と関連する問題であることが示唆されたと言えよう。

#### 自己愛傾向と自己概念の特徴との関連について

まず、肯定性に関しては想定どおり自己愛傾向と正の関連が見られた。これは対人恐怖同様、これまでの先行研究(Rhodewalt & Morf, 1995など)に一致した知見と言えよう。

乖離性・不安定性と自己愛全体については、有意な関連が得られなかったが、自己愛全体と高揚的自己像との偏相関は有意であった。拠点としている自己像自体がもともと肯定的であるが、それよりもさらに肯定的な自己像を保持していることが、自己愛傾向と関連することが示唆されていると言える。これは過剰に肯定的で誇大な自己像を構築することが自己愛人格者の中心的特徴である(Morf & Rhodewalt, 2001) こととも符合すると理

解できる。

自己愛人格傾向の下位側面に注目すると、相関分析・重回帰分析において、注目・賞賛欲求と乖離性・不安定性との有意な正の関連・影響が見られた。高揚的・卑下の自己像いずれとの偏相関も有意であり、肯定的・否定的いずれの方向への乖離も、注目・賞賛欲求を高めることが示唆されたと言える。肯定的・否定的に乖離して不安定性がありながらも、自己概念を肯定的なものとして一面的に確認しようとするがゆえに、注目や賞賛など、誇大性を確認するフィードバックへの希求性が高まっていると考えられる。得られた係数の値がそれほど高くはないため安易な解釈は避けたいが、乖離や矛盾のある自己概念が自己愛人格の中心的な欲求や動機づけ (Morf & Rhodewalt, 2001) の背景因となっているとも考えられよう。

またこの結果とは対照的に、自己主張性と不安定性との負の関連が重回帰分析において示されていた。これは、誇大な自己概念を堅固に構築し、自身の不安定性を打ち消すための防衛的対処として自己愛人格的な自己主張がとられうること示唆していると考えられる。強い自己主張によって誇大な自己像を他者に印象付けることで、自己の不安定で脆弱な側面を否定しようとするプロセスが結果に反映されているとも考えられる。

これらの解釈を考えあわせると、自己愛的な人格構造の中には、自己概念に乖離があり不安定であるが故に賞賛を求める働きと、その不安定性を打ち消すために誇大な自己を積極的に構築する働きとが並存しているとも考えられる。今回の結果は、自己愛人格におけるこうした防衛的な自己構築のプロセス (Morf & Rhodewalt, 2001) が端的に反映されたものとも理解できよう。

### まとめと今後の課題

以上の検討から、乖離や不安定性のある自己概念が、対人恐怖傾向や自己愛傾向の形成や維持の過程に共通して関わっている可能性が示唆された。

特に両傾向に共通した結果として、乖離性や不安定性が、社会的フィードバックへの敏感さや関心の高さを表す下位側面 (対人恐怖傾向の「自分や他人が気になる悩み」、自己愛傾向の「注目・賞賛欲求」に相当) に関連していたことが挙げられる。このことは、対人恐怖と自己愛人格の双方が、乖離や不安定性のある自己概念を、他者からの評価や賞賛などに基づいて維持しようとするプロセスとして理解できることを端的に示しているとも考えられる。自己愛人格に関しては、こうした矛盾のある自己概念を防衛的に維持しようとする自己構築プロセスのモデル化 (Morf & Rhodewalt, 2001) が進められているが、対人恐怖に関してはこうしたプロセスに焦点を当てた試みはなされていない。今後は、こうした不安定な自己概念がどのような行動や認知によって構築・維持されているのか検討し、対人恐怖や自己愛人格における自己構築プロセスのモデルを構築及び精緻化することが検討課題となるであろう。

なお本研究の主な課題としては、乖離性指標に関して、再検査信頼性がやや低かった点や仮説検証に関わる分析の係数の値が全体的に低かった点などが挙げられる。これは、乖離性指標が場面想定法に基づいて生成される指標であったためと考えられる。教示によって想定された状況の内容が個人間で異なり、そのために乖離性指標が示す内容にも個人間での散らばりが大きくなったことが、指標の信頼性や分析結果の収束性に少なからず影響したと考えられる。測定手法上、不可避な問題であるとも考えられるが、今後は想定場面を限定して測定内容を収束させるなど、手法の改善の余地があると考えられる。今後これら課題を踏まえた検討を蓄積することで、対人恐怖と自己愛人格がどのようなプロセスで形成・維持されているのか、より精緻に理解できるようになると考えられる。

## 引用文献

- Campbell, J. (1999). Self-esteem and clarity of the self-concept. In R. F. Baumeister (Ed.), *The self in social psychology*. New York: Psychology Press. pp. 223–239.
- de Jong, P. J. (2002). Implicit self-esteem and social anxiety: Differential self-favouring effects in high and low anxious individuals. *Behaviour Research and Therapy*, **40**, 501–508.
- Hirsch, C. R., Clark, D. M., Mathews, A., & Williams, R. (2003). Self-images play a causal role in social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, **41**, 909–921.
- 堀井俊章・小川捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, **20**, 55–65.
- 梶田毅一 (1988). 自己意識の心理学 第2版 東京大学出版会
- 上瀬由美子・堀野 緑 (1995). 自己認識欲求喚起と自己情報収集行動の心理的背景——青年期を対象として—— 教育心理学研究, **43**, 23–31.
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1992). Stability of self esteem: Assessment, correlates, and excuse making. *Journal of Personality*, **60**, 621–645.
- 北西憲二・久保田幹子 (1998). 社会恐怖とひきこもり 最新精神医学, **3**, 227–234.
- Leary, M. R., & Kowalski, R. M. (1993). The interaction anxiousness scale: Construct and criterion-related validity. *Journal of Personality Assessment*, **61**, 136–146.
- Markus, H., & Wurf, E. (1987). The dynamic self-concept: A social psychological perspective. *Annual Review of Psychology*, **38**, 299–337.
- 松井三枝 (1990). 対人不安と対他認知体系——Self-identity System の検討—— 心理学研究, **61**, 94–102.
- Mischel, W., & Morf, C. C. (2003). The self as a psycho-social dynamic processing system: A meta-perspective on a century of the self in psychology. In M. R. Leary, & J. P. Tangney (Eds.), *Handbook of self and identity*. New York: Guilford Press. pp.15–43.
- 三好郁男 (1970). 対人恐怖症について——「うぬぼれ」の精神病理—— 精神医学, **12**, 389–394.
- Morf, C. C., & Rhodewalt, F. (2001). Unraveling the paradoxes of narcissism: A dynamic self-regulatory processing model. *Psychological Inquiry*, **12**, 177–196.
- 鍋田恭孝 (1997). 対人恐怖・醜形恐怖——「他者を恐れ・自らを嫌悪する病」の心理と病理—— 金剛出版
- 永井 徹 (1985). 対人恐怖の心性とパーソナリティについての研究 I 東京都立大学人文学部人文学報, **172**, 101–117.
- 永井 徹 (1994). 対人恐怖の心理——対人関係の悩みの分析—— サイエンス社
- 岡田 努・永井 徹 (1990). 青年期の自己評価と対人恐怖の心性との関連 心理学研究, **60**, 386–389.
- 岡野憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析——対人恐怖から差別論まで—— 岩崎学術出版社
- 小塩真司 (1998). 自己愛傾向に関する一研究——性役割との関連—— 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), **45**, 45–53.
- 小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, **10**, 35–44.
- 小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み 教育心理学研究, **50**, 261–270.
- Rapee, R. M., & Heimberg, R. G. (1997). A cognitive-behavioral model of anxiety in social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, **35**, 741–756.
- Rhodewalt, F., & Morf, C. C. (1995). Self and interpersonal correlates of the Narcissistic Personality Inventory: A review and new findings. *Journal of Research in Personality*, **29**, 1–23.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. New Jersey: Princeton University Press.
- 清水健司・海塚敏郎 (2002). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, **50**, 54–64.
- 谷 冬彦 (1997). 青年期における自我同一性と対人恐怖心性 教育心理学研究, **45**, 254–262.
- 鑑 幹八郎 (1990). アイデンティティの心理学 講談社
- 牛島定信・佐藤譲二 (1997). 非精神病性のひきこもりの精神力動 臨床精神医学, **26**, 1151–1156.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64–68.

## **Dissociated and Unstable Self-Concept as a Common Factor in Social Phobia and Narcissism**

Naoki KAWASAKI<sup>1</sup> and Masahiro KODAMA<sup>2</sup>

<sup>1</sup> Doctoral Program in Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

<sup>2</sup> Institute of Psychology, University of Tsukuba

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2007, Vol. 15 No. 2, 149-160

The possible link between narcissism and social phobia has traditionally been discussed among clinical psychologists and psychiatrists in Japan. To examine the possibility, we hypothesized that dissociated and unstable self-concept was at the basis of both narcissistic personality and social phobia. A questionnaire was administered to 341 undergraduates, which included scales of positivity, dissociation, and instability of self-concept, as well as narcissistic and social phobic tendencies. Evaluative discrepancy between images of perceived self in positive and negative hypothetical situations was used as an index of the dissociation. Results suggested that positivity of self-concept had a negative correlation with social phobic tendency and a positive one with narcissistic tendency. In contrast, dissociation and instability of self-concept had a positive correlation with some subscales of the two tendencies. The role of dissociated and unstable self-concept in constructing and maintaining processes of the self in social phobia and narcissism was discussed.

**Key words:** social phobia, narcissism, dissociation and instability of self-concept